

## 映画評

### 2017レビュー

#### 私的な素敵なシネマ2017 井上静夫 同人誌主宰

2017年の映画を振り返ってみると、洋画は全世界待望と謳われた『スターウォーズ』最後のジエダイ』や『美女と野獣』が、邦画は『メアリと魔女の花』を始めとするアニメが巷間を騒がせた。2017年の映画といっても、『スターウォーズ』は40年も前からのシリーズものであり、『美女と野獣』や『メアリと魔女の花』にしてもデイズニーやジブリの作品として、いわゆる延長線上にある作品である。つまり、年月を経ても相変わらずの傾向であるとの印象はどうしても拭いきれない状況にあるといえる。

そんな流行の作品とは一線を画し、ひそかに上映される地味な映画にも目を向けてきた筆者が、2017年に観た映画を総括するとともに、お気に入りの作品についてご案内してみようと思う。

(洋画)

- ① 『パターンソン』(ジム・ジャームッシュ 米)
- ② 『オン・ザ・ミルキー・ロード』(エミール・クストリツァ セルビア・英・米)
- ③ 『人類遺産』(ニコラウス・ゲイハルター オーストリア・独・

仏)

- ④ 『人生タクシー』(ジャファル・パナヒ イラン)
- ⑤ 『ブラインド・マツサージ』(ロウ・イエ 中・仏)
- ⑥ 『草原の河』(ソントアルジャ 中)
- ⑦ 『欽 ARAGANE』(小田香 ボスニア・ヘルツェゴヴィナ・日)
- ⑧ 『立ち去った女』(ラヴ・ディアス フィリピン)
- ⑨ 『笑う故郷』(ガストン・ドウプラット マリアノ・コーン アルゼンチン・スペイン)
- ⑩ 『エンドレス・ポエトリー』(アレハンドロ・ホドロフスキー 仏・チリ・日)

(邦画)

- ① 『光』(河瀬直美)
  - ② 『無垢の祈り』(亀井亨)
  - ③ 『ニコトコ島』(大力拓哉・三浦崇志)
  - ④ 『サロメの娘 アナザサイド in progress』(七里圭)
  - ⑤ 『息の跡』(小森はるか)
  - ⑥ 『右目と左目で見る夢(短編集)』(山村浩二)
  - ⑦ 『映画 夜空はいつでも最高密度の青空だ』(石井裕也)
  - ⑧ 『At the terrace テラスにて』(山内ケンジ)
  - ⑨ 『彼女がその名を知らない鳥たち』(白石和彌)
  - ⑩ 『あゝ荒野』(岸善幸)
- 注 カッコ内は監督名と制作国(洋画のみ)

洋画ではこの他、『壊れた心』『ゴッホ最期の手紙』『ブレンドンとケルズの秘密』『十年』『午後8時の訪問者』『セールスマン』『残像』『おクジラさま』『リュミエール』『サーミの血』などがあげられる。邦画もこの他、『夜間もやつてる保育園』『彼女の人生は間違いない』『二度目の殺人』『いぬむこいり』などがあげられる。

以上は劇場初公開作品であるが、それ以外では、タルコフスキ、ユーリ・ノルシユテイン、七里圭作品の特集が見られたのがうれしい。最近、旧作品がデジタルリマスター化されるおかげで、映画館で再び観られる機会が増えるようになったのは映画ファンにとっては何よりである。特集上映以外では『牯嶺街少年殺人事件』（エドワード・ヤン）や『ゴンドラ』（伊藤智生）なども観られ、幸運だった。

洋画のお気に入りラインナップを見ると、今回とびぬけて好みの作品といたったものがない代わり、粒ぞろいの作品がずらりと並んだという印象である。①から⑩までどれが①になってもどれが⑩になっても遜色ないといえる。時間の経過や見方の相違などによって入れ替わることも十分考えられ、お気に入り度合いは拮抗している。

制作国についても、一覧して多岐に渡っていることがわかる。今やアジア映画は当然のようにラインナップに入ってくるのであるが、『鉾 ARAGANE』のボスニア・ヘルツェゴヴィナや、『笑う

故郷』のアルゼンチンなどはまだまだめずらしい存在である。

邦画のお気に入りラインナップは今回特に多彩だった。個性豊かな作品が目白押し、充実した作品群である。注目すべきは、実力派監督の作品から、いわゆるインディーズ映画といわれる監督作品まで幅広いことだ。特に『ニコトコ島』の大力拓哉・三浦崇志や『息の跡』の小森はるかなど、若手作家が台頭し、卓越した映画作りをしていることに邦画の未来を感じることが出来た。これは2017年の収穫である。

洋画・邦画を通じてドキュメンタリーとアニメーションが健闘したのもうれしかった。ドラマとはひと味もふた味も異なるドキュメンタリーとアニメーションは映画をより豊かなものにしてくれる。

個々の作品に目を移してみよう。洋画の『パターンソン』は地味な小品であるのにとりわけ光っていた。淡々とした展開ながら心に響く、いわゆるじわじわ系の作品である。逆に、『オン・ザ・ミルキー・ロード』は、圧倒的なエネルギーで戦争をも笑い飛ばす勢いで人生を謳歌していて対照的だった。ドキュメンタリーにも同じく対照的な作品があった。朽ちていく廃墟を静かに綴る『人類遺産』と光と轟音で見せつける『鉾 ARAGANE』。作品の傾向は異なるがどちらの映像も美しかった。

美しい映像といえば『草原の河』もそうだ。言葉を超えた美しい映像のこの映画、中国映画とされているが、チベット人による

チベット映画であることにも注目したい。そして同じ中国映画の『ブラインド・マツサージ』もまた盲人の光と闇を独特の色彩感で描き、秀逸である。

洋画全体を眺めてみると『草原の河』と『鉦 ARAGANE』以外の作品は実力派監督あるいは定評ある監督で占められていることにも着目したい。とりわけ、『エンドレス・ポエトリー』のホドロフスキーは87歳、『残像』のアンジェイ・ワイダは90歳のときの作品である。

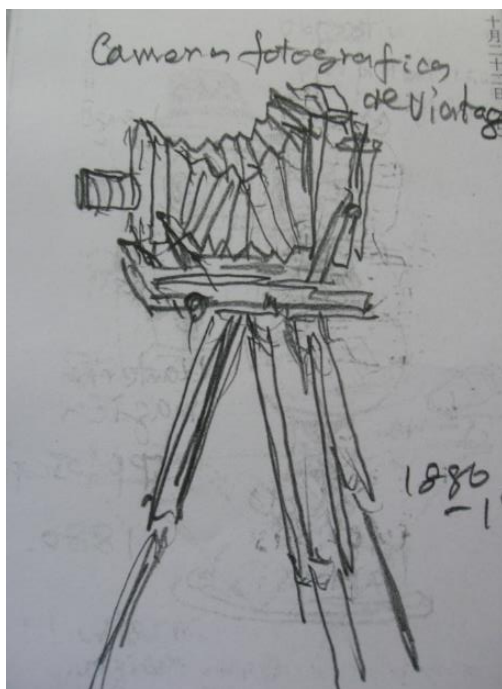
2017年の邦画は多彩だったが、その中でも『光』は頭ひとつ抜き出た感がある。光にこだわり、音にも、リアルにもこだわり、孤独な魂の結びつきを見事に映像に結実してみせた。これ以外のラインナップを眺めてみると、これだけ作風の異なる映画が並んだ年もめずらしい。例えば『ニコトコ島』と『息の跡』を作った若手監督はともに目から鱗のユニークな作品で、今後が気になる存在だ。

七里圭作品は期待通り純度の高い実験的芸術作品で、映画の方から観客を選ぶ、という作品であったし、山村浩二作品も短編集ながら、これまたコアなファンには垂涎モノで、多様なアニメーションを堪能できるものだった。

詩の世界観をうまくすくい取った『映画 夜空はいつでも最高密度の青空だ』と、演劇的手法が冴えわたった『At the terrace テラスにて』はともに映画の境界線を越えようとする意欲的作品

であったし、『あゝ荒野』は前後編合わせて304分という長尺ながら圧倒的パワーのエンタテインメントで観客を飽きさせなかった。その反対に、閉塞感とやりきれなさだけが残る『無垢の祈り』という作品もあったが、これもまた映画なのだ実感させられるものだった。

2018年がどんな年になるのか想像できないが、どんな年になろうと私的に素敵な映画に出会って、またこうしてみなさんにご紹介できるよう望んでやまない。



蛇腹式写真機  
シネマミュージアム(スペイン)